

## 〈小学校 特別活動〉

### 当事者意識を持ち、係活動に主体的に取り組む児童の育成

～自他のよさを認め合い、創意工夫を生み出す対話の工夫～

宮古島市立北小学校 教諭 平良 ゆかり

## I テーマ設定の理由

### 1 教育的背景と目指す資質・能力

現代は将来の予測が困難なVUCAの時代であり、文部科学省の第四期教育振興基本計画では「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」が基本コンセプトに掲げられた。特別活動においても、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの視点を通じた資質・能力の育成が求められている。自主的・実践的な活動を通して目標を達成し、直面する課題を対話的に解決するプロセスは、自己有用感を高めることにもつながると考える。

### 2 学級の実態と係活動について

本学級においても「よりよい学級づくり」に取り組んできたが、実態としては主体的な児童がいる一方で、「誰かがやってくれるだろう」という消極的な姿勢も見られ、全員が学級活動を「自分事」として捉えるには至っていない。本来、係活動は「当番活動」とは異なり、児童の願いに基づき創意工夫を発揮する自治的な活動である。しかし、これまで学習指導や生徒指導等の喫緊の課題への対応を優先し、活動を児童に任せきりにしていたため、個々の思いを価値付けるような適切な支援が十分ではなかった。こうした、主体的によりよい学級を目指す自治的活動を通して、学習の土台となる「支持的風土」を築くことは極めて重要である。改めて教師が明確な教育的意図を持って関わり、児童の変容を促していく必要があると考えた。

### 3 研究のねらいと教師の役割

実践にあたっては、心理的安全性を基盤とした「自他のよさを認め合う場」を構築し、「係活動でどのような学級を創っていくのか」という願いの共有から、計画・実践・振り返りに至るプロセスで児童の創意工夫を引き出す支援を行う。「自分たちの活動が学級をより良く変えていく」という手応えを実感していくことで、係活動を単なる役割分担としての「自分事」から、「自分たち事」へと集団の質を高め、当事者意識を持って主体的に活動する集団を目指す。

その際の教師の役割は解決策の提示ではなく、児童が対話を通じて「納得解」を導き出すプロセスを価値づけ、伴走することである。小さな気付きや失敗さえも「次なる進化へのステップ」と捉え直す関わりを積み重ねることで、一人一人が「自分の力が役に立っている」という自己有用感を持ち、学級全体のウェルビーイング向上へと繋げていく。

#### 4 研究主題の設定

本研究では「当事者意識を持ち、係活動に主体的に取り組む児童の育成」を主題に据え、「自他のよさを認め合い、創意工夫を生み出す対話の工夫」をサブテーマとして設定した。自分たちの手で学級生活を豊かにしていく面白さを体感させることで、誰もが安心して考えを発信できる土壌を築きたい。児童一人一人が自分たちの学級に合った工夫を形にする姿を引き出し、個人と集団のウェルビーイングを高めながら、全員が当事者意識を持って係活動に参画する学級を目指していく。

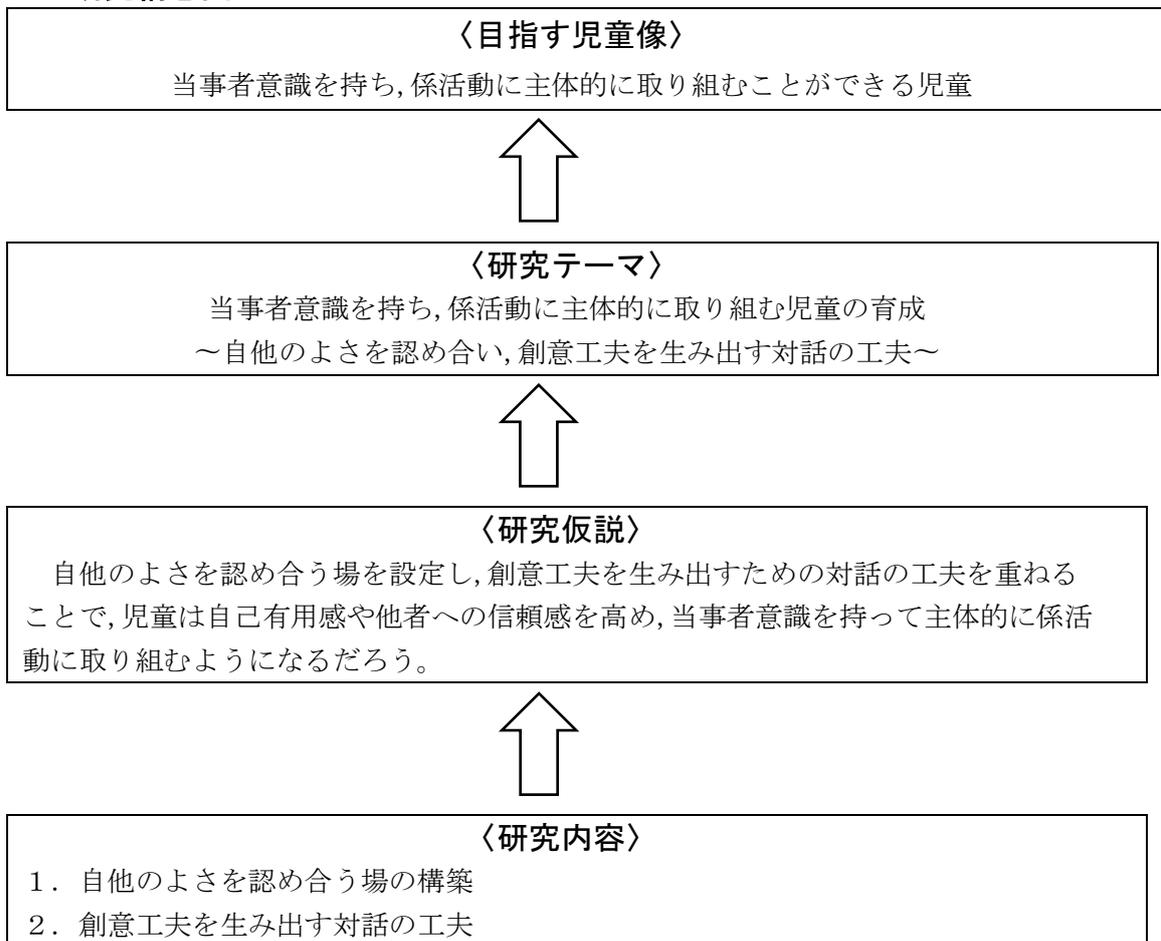
### II 研究目的

自他のよさを認め合う場を設定し、創意工夫を生み出す対話の工夫を重ねることで、児童が当事者意識を持って主体的に係活動に取り組む姿を、意識の変容や活動の質の向上の観点から検証する。

### III 研究仮説

自他のよさを認め合う場を設定し、創意工夫を生み出すための対話の工夫を重ねることで、児童は自己有用感や他者への信頼感を高め、当事者意識を持って主体的に係活動に取り組むようになるだろう。

### IV 研究構想図



## V 研究内容

### 1 当事者意識を持ち、係活動に主体的に取り組む児童について

学級活動における当事者意識とは、「係活動を自分事として捉え、よりよい集団を目指して自ら課題を見出し、主体的に行動する姿」と定義する(図1)。「学級をもっと楽しくしたい」という願いを持つことは、係活動を自分事化する第一歩である。さらに当事者意識を持つ姿とは、その願いを具現化するために「何が必要か」を構想し、仲間との対話を通して創意工夫を凝らし、実践へと移す姿であると捉える。

図2で示すように、その変容プロセスとして、自他のよさを認め合うことで醸成される心理的安全性を基盤に、仲間との対話を通して創意工夫を生み出し、それらを実践していくことで自己有用感を育み、当事者意識を持って主体的に取り組む姿へ至ると考えた。



図1 当事者意識を持っている姿

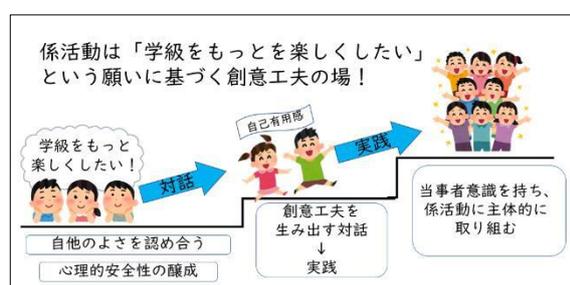


図2 当事者意識への変容プロセス

### 2 自他のよさを認め合う場の構築について

本研究における当事者意識の変容プロセスには、基盤となる人間関係が不可欠である。『小学校学習指導要領(平成29年)解説特別活動編』(以下、『解説特活編』)の「人間関係形成」の内容においても、「年齢や性別といった属性、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくるのが大切である」と示されている。この指針を基盤として本研究テーマに迫るため、「自他のよさを認め合う場」を構築し、学級内に心理的安全性を醸成することを目指した。個々の児童が安心して多様な意見を出せる環境が、創意工夫を促す対話の土台となり、当事者意識を持ち、主体的に係活動に取り組むことへつながると考える。

### 3 創意工夫を生み出す対話の工夫について

『解説特活編』において、係活動は「児童の創意工夫を十分に生かして計画し活動できるように適切に指導することが望まれる」と示されている。これは、自治的な活動であっても、教師による意図的な教育的配慮が不可欠であることを示唆している。限られた時間の中で具体的な実践へとつなげるためには、児童の気づきを引き出す「対話の質」を支援する教師の役割が求められる。そこで本研究では、自他のよさを認め合う心理的安全性を基盤に、目的意識を持った対話の場を積み重ねることで、創意工夫が自発的に生まれる環境の構築を目指す。

## 4 相互評価における当事者意識の育成について

### (1) 相互評価の実践について

本研究では、「自他のよさを認め合う場」の構築と「創意工夫を生み出す対話」の深化を目指し、相互評価の工夫を図る。評価活動を単なる「振り返り」の手立てにとどめず、仲間の実践を認め合うプロセスを通して心理的安全性を高め、建設的な対話へと発展させるための活動として位置付ける。また、相互評価の具体策として、Q-Uの開発者である河村茂雄氏の理論を援用した「ピアフィードバック」を活用する。なお、本研究では同氏の著書における「ピアフィードバックのゼロ段階」（2025）の知見を参考に実践していく。

### (2) ピアフィードバック（相互評価）について

ピアフィードバックとは、対等な仲間同士で行う客観的な評価や助言を指し、カウンセリングの領域で用いられてきた手法である。近年では組織のパフォーマンス向上を目指す企業経営の現場でも積極的に取り入れられており、チームの生産性を高める有効な手段として注目されている。表1に示すように、個人・集団の両面において認知能力の向上に寄与すると考えられる。

表1 ピアフィードバックの効果

個人の 効果	他者を観察し、自身の活動状況と照らし合わせることで、客観的な自己理解（メタ認知）にもつながる。
集団の 効果	多角的な視点から自己認知を高め、チームワーク向上や主体的な改善、学習促進に効果を発揮する。

### (3) ピアフィードバックの導入による二つの意義

ピアフィードバック導入の意義は、主に以下の二点に集約される。第一に、他者を客観的に評価する過程でメタ認知が働き、自らの活動を省みることで、係活動への当事者意識が深化する点である。第二に、多角的なフィードバックを通じて個々の創意工夫が価値付けられ、対話を通して互いのよさを認め合うことでチームワークが向上する点である。このように、自己と集団の両面からアプローチすることで、学級全体のウェルビーイングの向上を目指す。

### (4) 実践のプロセスと手立て

#### ① Q-Uの分析に基づく集団づくりと段階的アプローチの構築

学級集団の実態分析として用いた「Q-U」は、河村茂雄氏が開発した学級経営アセスメントツールである。そのWeb版（以下、WEBQU）は、インターネット環境を活用することで、学級集団の状態と児童個別の満足度を回答当日に把握可能な学級経営サポートシステムである。これにより、教師の主観のみならず、客観的なデータに基づいた学級経営の改善や、支援が必要な児童への対応が可能となった。本学級の5月実施の結果、集団の状態は「ゆるみ型－流動－停滞」に分類された（図3）。

児童生徒集計 コメント			
ゆるみ型－流動－停滞			
ルール	リレーション	安定度	活性度
学級ルールの共有化が低いレベルで、小グループ同士の対立もみられ、利己的な行動も増えています。	児童生徒は小グループに関して固まり、小グループ同士の対立も多く、児童生徒の被侵害感が高まっています。	小グループ同士のトラブルが頻発し、学級は防衛的な雰囲気になり、安定度は下がってきています。	児童生徒同士でけん制し合っているため、各自の意欲が建設的な相互作用にはならないことがしばしばです。
↓	↓	↓	↓
<b>具体例</b> 行動の指示をするときは、やる理由を具体的に説明し、やりされる量で個別に取り組ませるといいでしょう。	<b>具体例</b> 個別対応で、個人の取り組み方や頑張りについて、まず教師が率先して認める言葉がけをするといいでしょう。	<b>具体例</b> 個別活動を中心に組み合せ、個々の頑張りを取り上げ、全体に説明してあげるといいでしょう。	<b>具体例</b> 係・掃除等の活動は一人一役で取り組ませ、それを輪番制にし、役割を理解できるようにするといいでしょう。

図3 本学級におけるWEBQUアンケートの集計コメントより

この結果は、活発さの裏側に、児童が「周囲の反応を恐れ、本音で対話できない」という強い防衛的心理を抱えている実態を如実に示している。他者の活動を認め、よさを生かし合う「人間関係形成」を実現するためには、心理的安全性を基盤とした「他者と関わることへの安心感」を醸成することが優先課題であると判断した。

### ② 5つの学級集団タイプにおける指導の方向性

前述の通り、本学級はWEBQUの診断結果から「ゆるみ型－流動－停滞」に分類され、児童が被侵害感や防衛的な雰囲気を抱えている実態が浮き彫りとなった。この状態は、河村氏の提唱するタイプ区分（表2）において、集団機能が停滞し、個々が心理的距離を置いている「タイプ3：空洞化した傾向」に近い状態であると捉えることができる。

表2 WEBQUの結果における学級集団タイプ（本学級はタイプ3の傾向）

タイプ1	同一化的傾向	教師の期待に沿おうとする依存的な状態。効率的に全体活動が展開されるが、協働学習は思ったほど深まらない。
タイプ2	形骸化した傾向	ほめ合いなどの建前に終始した、やらされている状態。人間関係も希薄で、新しい活動への意欲が高まりにくい。
タイプ3	空洞化した傾向	関係のないおしゃべりに終始したなれ合いの状態。嫌われないための同調行動が蔓延している。
タイプ4	無気力化した傾向	相互に無関心でかかわりも低調なしらけた状態。傷つかないための回避・逃避行動が頻発し、無気力感に満ちている。
タイプ5	防衛的風土	揚げ足を取ったり引き下げたりするギスギスした状態。さらに欲求不満が高まると、いじめ被害が起こりやすい。

河村氏は、学級集団の状態を5つのタイプに分類し、それぞれの段階に応じた指導の在り方を提唱している。特に、ピアフィードバック等の相互評価における対話を導入する前段階において、教育的効果を最大化するための段階的アプローチの重要性を指摘している。この知見は、良好な人間関係の構築こそが、ピアフィードバックや協働学習を成立させる不可欠な土台であることを示唆している。したがって、本研究では単に手法を導入するのではなく、まずはこの防衛的な雰囲気から、心理的安全性の構築へとつなげる段階的なアプローチが必要であると判断した。表2で示した本学級のタイプに応じた適切な関わりを通して、自他のよさを認め合う場を構築した上で、創意工夫を生み出す対話へとつなげていく。

表3 ピアフィードバックへの段階的なアプローチ

学級タイプ3における前段階の3つの取り組み

- ・ ソーシャルスキルを教えるから取り組ませる。
- ・ 不安を和らげるためのレクリエーション的な活動を取り入れる。
- ・ ピアフィードバックの活動の構成を工夫し、「ひな型」を用意する。

表3の取り組みを、以下の3つの実践を通して、自他のよさを認め合う場を構築する。

#### ア 道徳科と学級活動を往還する学び

「認め合い」の土壌を醸成するため、道徳科の「相互理解・寛容」の内容項目の授業を起点とし、他者との意見の相違を尊重する重要性を考察させる。本研究では、道徳科で深めた道徳的価値を、学級活動での実践へと転移させる「往還的な学び」を構築する。さらに、ソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）を通して、他者を尊重する聴き方や伝え方を具体的に習得させることで、学級内の心理的安全性を高め、互いを認め合う対話的な関係の形成を促す。

#### イ 不安を和らげるためのレクリエーション的な活動

本学級における防衛的な雰囲気を緩和し、ピアフィードバック導入の心理的な土台を作るため、レクリエーションを意図的に組み込んでいく。本実践におけるレクリエーションの意義は、緊張の緩和と所属感の醸成にある。児童が互いに打ち解け、安心感を持つことができる関係性が築かれて初めて、他者からの評価や指摘を「否定」ではなく「成長のためのエール」として受容できるようになるからである。

#### ウ ピアフィードバックの構成を工夫した「ひな型」の活用

不安感からくる発言の停滞を防ぐため、評価基準であるルーブリックを対話の「ひな型」として活用する。「何を評価し、どうアドバイスすべきか」という視点をルーブリックで可視化し、それを対話の手立てとしてワークシートに組み込む。これにより、児童が根拠を持って創意工夫を認め合い、対話を深めているものとする。

## VI 授業実践

### 1 道徳科と学級活動を往還する学びの構築

#### (1) 道徳科の授業実践

##### ① 主題名及び教材名

広い心を持って「学級新聞作り」(出典 光文書院)

##### ② ねらい

自分と異なる意見も大切にしようとする態度を育てる。

##### ③ 教材について

学級新聞を作る際、黒羽さんが事前の約束と違う記事作りを始める。清水さんは事前に決めたとおりにすることを主張する。黒羽さんの考えを認めるか、決めたとおりにするか、責任者の「わたし」は判断に迷ってしまう。

##### ④ 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点【評価】
導入	1. 係のメンバーとうまくやっていくために必要なことを考える。	これまでの学級活動を思い出して考えさせる。(特別活動を意識した授業の視点)
展開	2. 「学級新聞作り」を読んで、主人公の葛藤について考える。	「わたし」のすっきりしない気持ちの原因を多面的・多角的に考える。
	3. 「わたし」の係が、これからよりよい学級新聞を作るためには、どのようなことが大切か考える。	「わたし」と「黒羽さん」の気持ちを出し合った上で、「わたし」はこれからどうしたら良いか考える。
終末	4 今日学習を振り返り、自分と違う意見や考えに触れたとき、どのようなことが大切か考える。	【評価】 自分と違う意見に触れた時の態度について考えることができたか。 (児童の変容を学級活動でも見取っていく)

##### ⑤ 児童から出た意見

自分と違う意見が出た時

- ・相手の意見の理由をきく
- ・意見を合わせる
- ・思いやりをもつ
- ・「それもいいね」と認め合う
- ・自分の意見も素直に話す。
- ・合意形成をする
- ・納得できるまで話し合う。

##### ⑥ 授業の考察

授業実践において、学級活動を関連させたことで、「合意形成」や「話合う」などのワードを引き出すことができた。今後の活動での児童を見取っていきながら、道徳科と学級活動の往還的な学びを図っていく。



ピアフィードバック後は、活動に変容が見られた。「給食席替え係」は、週1回、給食時のくじ引きによる席替えを企画し、学級の雰囲気盛り上げていた。当初は協力して取り組んでいたものの、活動上のつまづきにより、活動が停滞する時期があった。しかし、ピアフィードバックを通じて他の係から称賛や助言を得たことで、児童は自分たちの活動を客観的に見直すことができた。その結果、メンバーで話し合っ工夫を重ねることで活動を再開させることができた(図7)。



図7 活動の停滞から再開へ

### 3 ピアフィードバックの活動の構成を工夫した「ひな型」の活用

前述の通り、他の係からの助言を受けて活動を多角的に見つめ直せるようになった児童に対し、次に「係内でのピアフィードバック」を導入した。係のメンバー内でのピアフィードバックは、自律的な運営を目指したものである。そこで、安心して伝え合うための「型」として、ルーブリックを活用した評価シートを作成した(図8)。指標には「計画性」「主体性」「協力」「創意工夫」「責任感」の5項目を設定した。対話の「ひな型」を用意したことで、フィードバックの質を高めるアプローチとなった。

フィードバック内容	A すごい！ よくできた(お手本になる行動ができた)	B がんばった！ だいたいできた(やるべきことができた)	C もう少し努力が必要 (アドバイスを確認し、次の一歩を見つめよう)	( )に えらんだABC をかこう
1. 計画的に がんばった	係のやることや順番を決め、計画通りにみんなをリードできた。	自分のやるべきことをわかって、しめきりまでに終わらせた。	やることをわすれたり、守れなかった。 アドバイス: やるごりリストをかくことから始めよう。	( )
2. 進んで がんばった	自分の仕事が終わったあと、自分から次の仕事をさがしたり、友達の手伝いをしたりした。	自分の係の仕事は言われなくてもすぐに取っかかった。	先生や友達に言われるまで、仕事に取りかかれなかった。 アドバイス: 何をすべきかを自分で見つけて、すぐにスタートさせよう。	( )
3. 協力が できた	みんなの意見を聞き、なかく相談して、活動を成功させることができた。	メンバーと協力し、自分のやることを連絡しあうことができた。	話を聞かず、メンバーと話せなかった。 アドバイス: まずは、メンバーの話をしっかり聞くことから始めよう。	( )
4. アイディア を出した	もっと楽しく、よくするための新しいアイデアを出して工夫できた。	「こうしたらいいかも」という考えをメンバーに伝えることができた。	自分の考えやアイデアを出すことができなかった。 アドバイス: 自分の考えを「こうしたい」と伝えてみよう。	( )
5. 最後まで がんばった	活動の後も「つぎはどうする?」とふりかえり、次の準備までやりきった。	途中でやめないうで、最後までやりきった。	途中でやめてしまった。 アドバイス: 最後までやりきる力をつけるように、こつこつ続けていこう。	( )

図8 対話の手立てがある評価シート

	A (お手本になる行動が できていた)	B (やるべきことが できていた)	C (これから がんばろう)
1. 計画的 もっとくわしく	係のやることや順番を決めてみんなをリードしていた。	自分のやるべきことをしめきりまでに終わらせていた。	やることをわすれていた。
2. 進んで もっとくわしく	次の仕事をさがしたり、友達の手伝いをしたりしていた。	進んで取り組んでいた。	友達の声かけて仕事をしていた。
3. 協力 もっとくわしく	友達の話を最後まで聞いて、なかくそうだった。	メンバーと協力して仕事をしていた。	一人で仕事を進めていた。
4. アイディア もっとくわしく	アイデアを出して工夫していた。	アイデアをメンバーに伝えていた。	アイデアを伝えていなかった。
5. 最後まで もっとくわしく	自分の仕事が終わると、次の仕事の準備もしていた。	最後までがんばっていた。	仕事がとちゅうまでになっていた。

図9 評価の根拠を書けるようにした

また、2回目の評価シート(図9)では、その文言を簡素化し、「もっとくわしく」の項目を設けたことで、評価の根拠を自分自身の言葉でより詳細に記述できるようにした。このように、段階的に支援の内容を精選していくことで、自律した対話を目指した。なお、このルーブリック作成には生成AIを活用した。AIとの対話を通じて、児童の実態に即した評価基準を短時間で言語化できたことは、評価シートの改善や指導準備の効率化につながった。実践の詳細は、次節の検証授業①にて報告する。

## 4 検証授業①

### 第4学年学級活動学習指導案

令和7年11月20日(木) 2校時  
宮古島市立北小学校 4年2組 34名

- 1 題材 「もっと仲良く！もっと楽しく！対話でつくる係の絆」  
学級活動(1)イ「学級内の組織づくりや役割の自覚」

#### 2 題材について

##### (1) 児童の実態

2学期になると、曜日を決めて帰りの会でクイズを出すなどの工夫が見られ、活動の楽しさや集団への貢献を実感できている場面が多くなってきた。その一方で、計画の実行に至っていない係や、一部のメンバーのみの活動になっている係も見られる。要因としては、「話し合いのスキルの不足」、「係活動を自分事として捉えられていない」などが挙げられる。係活動の様子を観察すると、メンバー同士が建設的な対話をしている係と、人間関係の課題からそれぞれがやりたいことを進める活動に留まっている係がある。目的意識を持った対話が構築されていない係が多く、活動意欲の低下を招き、係活動を自分事として捉えられない児童が見られるのが現状である。

##### (2) 題材設定の理由

本題材では、児童の実態を踏まえ、係活動を「楽しく協働し、実行できる活動」へと変容させることを目的とする。具体的には、道徳科とのカリキュラム・マネジメントを行い、相互評価およびSST（ソーシャルスキルトレーニング）を通じて「人間関係形成」の資質・能力を育む。これにより、心理的安全性を担保した建設的な対話を実現する。また、ルーブリックを用いたフィードバックによって、児童が客観的な根拠に基づき自身の活動を振り返り、当事者意識を高めることを目指す。本時では、係のメンバー内で事前に行った「係活動評価シート」を共有・検討し、互いのよさや改善点について伝え合うことで対話を深めていく。こうした相互理解のプロセスを通じて、係活動の活性化を図る。

#### 3 特別活動 学級活動「(1)学級や学校における生活づくりの参画」の評価規準

観点	よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
評価規準	みんなで楽しい学級生活をつくるために他者と協働して取り組むことの意義を理解している。意見の比べ方やまとめ方を理解し、活動の方法を身につけている。	楽しい学級生活をつくるために、問題を発見し、解決方法について理由などを比べ合いながら合意形成を図り、協力し合って実践している。	楽しい学級生活をつくるために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己の考えを生かし、役割を果たして集団活動に取り組もうとしている。

#### 4 指導計画

日時	児童の活動 (学習)	ねらい	◎目指す児童の姿【観点】 (評価方法)
11/6 (木) 道徳	教材名 「学級新聞作り」 友達と一緒に活動 する時に大切なこ とを考えよう。	・自分とは異なる意見 や考え方を持つ友達 がいることを認め、 受け入れる態度を育 む。	◎広い心をもち、自分と異なる意 見も大切にしようとしている か。【B 相互理解・寛容】(ワ ークシート)
11/6 (木) 学活	ピアフィードバッ ク (他の係から)	・他の係からのアドバ イスを生かして、建 設的な話し合いがで きる。	◎みんなで楽しい学級生活をつ くるために他者と協働して取 り組むことの意義を理解して いる。意見の比べ方やまとめ 方を理解し、活動の方法を身に つけている。【学級活動(1)知 識・技能】(観察・振り返りカ ード)
11/13 (木) 道徳	I メッセージを使 って、ロールプレ イをする。	・I メッセージのよさ に気付き、互いの立 場を尊重しながら、 誠実に自分の気持ち を伝えようとする態 度を育てる。	◎相手との良好な関係を築くた めに、自分の状況や感情をどの ように伝えればよいか考え、適 切に表現しようとしている。 【B 相互理解・寛容】(観察・ ワークシート)
日常的な活 動	係のメンバーの評 価をする。	係のメンバーの活動を 観察する。	
11/20 (木) 学活 本時	ピアフィードバッ ク (係のメンバー同 士で)	・係活動における相互 評価の実践を通し て、当事者意識をも って活動の改善に取 り組もうとする。	◎楽しい学級生活をつくるため に、問題を発見し、解決方法に ついて理由などを比べ合いな がら合意形成を図り、協力し合 って実践している。【学級活動 (1)思・判・表】(観察・ワー クシート)

#### 本時の指導

##### (1) 本時のねらい

係活動における相互評価の実践を通して、当事者意識をもって活動の改善に取り  
組もうとする。

(2) 本時の展開

	児童の活動	指導上の留意点	目指す児童像と評価方法
導入	1. 前時の振り返り 2. 本時の活動を知る	・前時の係のメンバーへ相互評価について振り返る。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">                     ・相互評価での対話を通して、自分たちの係を見直そう。                 </div>			
展開	3. 相互評価を活用して対話を深める。  4. 対話を通して気づいたことをワークシートに書く。  5. 係のキャッチコピーを決めよう	・事前にチェックした係のメンバーの評価を見ながら、係のメンバーで対話できるようにする。  ・対話を通して気づいたことを書けるようにする。  ・相互評価をもとに気づいたことを生かした、キャッチコピーを考える。	◎楽しい学級生活をつくるために、問題を発見し、解決方法について理由などを比べ合いながら合意形成を図り、協力し合って実践している。【学級活動(1)思・判・表】(観察・ワークシート)
終末	6. 教師の話	・今後の係活動に意欲が持てるようにする。	

6 事後の活動

日常的な係活動		・互いの良かったところや改善点を生かしながら、主体的に実践していく。	
12/18 (木) 学活	2学期の振り返り	・2学期の係活動を振り返り、3学期に生かすことができる。	◎楽しい学級生活をつくるために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己の考えを生かし、役割を果たして集団活動に取り組もうとしている。【学級活動(1)主体的態度】(観察・振り返りカード)

### 【検証授業の考察】

本ルーブリックでは、コメント記入欄として「もっと詳しく」という項目を設け、評価の根拠を具体的に記述させる工夫を行った。例えば、Kさんの評価では「係のやるべき順番を決め、リードもできていた」という具体的な根拠が示され、「計画性」の項目において「お手本になる行動ができていた」というA評価が得られていた（図10左側）。このように根拠を明記させることで、評価の客観性と妥当性を高めることにつながった。一方で、通常学級での活動機会が限られているHさん（支援学級在籍）については、現状の活動実態に基づき「これからはがんばろう」というC評価が中心であった（図10右側）。しかしながら、「やる気アップメッセージ」の欄には「Hさんができる仕事をみんなで考えよう」という前向きな言葉が寄せられていた。評価数値の結果に捉われることなく、仲間として共に歩もうとする児童たちの温かい姿勢が示されたことで、Hさんは嬉しそうな表情を見せ、学級への強い所属感を持つことができたことと捉えている。また、Sさんにおいても、他者を支援することを通じて自己有用感を感じる姿が見られた。こうしたピアフィードバックの実践から、「自他を認め合う場の構築」へつながったと考える。

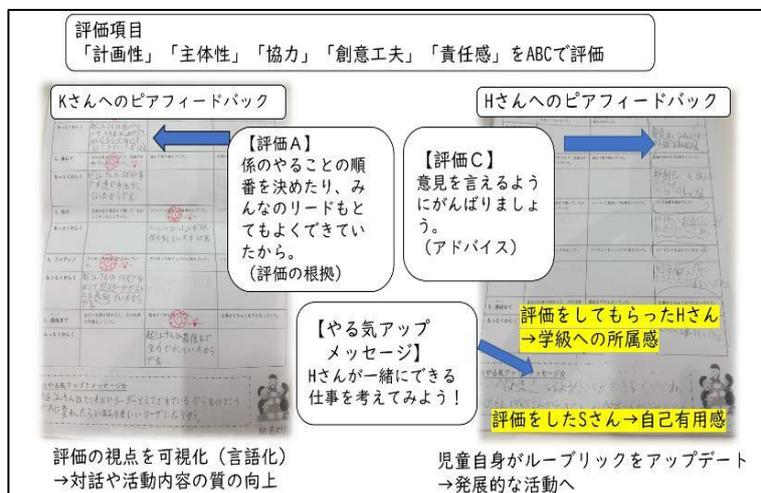


図10 児童のピアフィードバックの内容

「やる気アップメッセージ」の欄には「Hさんができる仕事をみんなで考えよう」という前向きな言葉が寄せられていた。評価数値の結果に捉われることなく、仲間として共に歩もうとする児童たちの温かい姿勢が示されたことで、Hさんは嬉しそうな表情を見せ、学級への強い所属感を持つことができたことと捉えている。また、Sさんにおいても、他者を支援することを通じて自己有用感を感じる姿が見られた。こうしたピアフィードバックの実践から、「自他を認め合う場の構築」へつながったと考える。

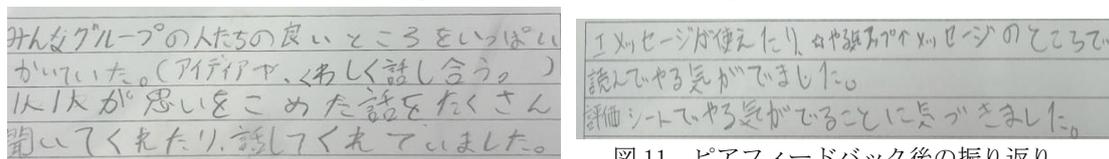


図11 ピアフィードバック後の振り返り

授業後の振り返り（図11）には、「みんなが友達の活動をよく見ていることが分かった」「以前よりも協力できそう」といった期待感を示す意見が多数見られた。また、この評価表には教員が把握しきれない日常の活動も記載されており、多角的な児童理解につながった。今後の発展的な活動として、児童自身がルーブリックをアップデートし、主体的に評価を行えるようになることを目指す。

### 【教師の振り返り】

検証授業終了直後は、「子どもたちの対話は深まったのか」「この活動で何を身につけさせることができたのか」という点にばかり意識が向き、反省に終始していた。しかし、学級活動の実践を重ねていく中で、相互評価を通じて対話が深まるなど、児童が変容・成長していく姿を目の当たりにし、特別活動の評価は単に数値化できるものではなく、その後の実践の中でこそ生かされるものだと実感した。

## 5 検証授業②

### 第4学年 学級活動指導案

令和8年1月22日(木) 2校時  
宮古島市立北小学校 4年2組 33名

#### 1 議題 「係活動が進化(パワーアップ)するルールを作ろう！」

#### 2 議題について

##### (1) 児童の実態

本学級の児童は、明るく素直である。学級活動(1)における学級会では、国立教育政策研究所の動画資料等を活用して「合意形成」の手順や方法を身につけてきた。その結果、学級活動において、互いの意見に折り合いをつけて対話を深める姿が見られるようになった。

係活動においては、「当番活動」と「係活動」の違いを明確に理解できるようにし、「学級をより楽しくする」という目的意識をもって取り組んできた。しかし、一部の児童への活動の偏りや、活動の停滞といった課題も顕在化した。そこで、道徳科(B 相互理解, 寛容)の教材「新聞作り」と学級活動を往還させるカリキュラム・マネジメントを展開した。道徳の時間で学んだことを、日常の学級活動の実践につなげることを教師自身が意識し、児童への価値付けや掲示の工夫を行い学びの定着を図った。さらに、ループリックを用いた自己評価や相互評価(ピアフィードバック)を取り入れ、活動の質を客観的に見つめ直す工夫を行った。2学期末には「友達の意見をしっかりと聞いてアイデアを出し合えた」「友達に評価してもらってやる気につながった」といった振り返りが出るなど、自他のよさを認め合う様子や、対話を通して創意工夫を目指す姿が見られた。

3学期に入り、1年間のまとめとともに高学年への進級を意識する時期となった。「3学期が終わるころに、どんな学級にしたいか」という問いを核にウェビングを行ったところ、「明るい」「おもしろい」「協力」といったポジティブなキーワードが中心となり、目指す学級像が明確となった。そこで、これまでの係活動を単に継続するだけでなく、自分たちの目指す学級像をもとに、係活動をより面白く「進化(パワーアップ)」をさせることをキーワードに係の編成を行ったところである。

##### (2) 議題選定の理由

自分たちの目指す学級像に向けて係組織の再編成を行った現在、組織の立ち上げに満足することなく、活動の充実に向けて実践内容を具体化させる段階で提案されたものである。「進化」をキーワードとし、単に役割を果たすだけでなく、「目指す学級像に向けて、どのように工夫し盛り上げていくか」という視点を共有したい。創意工夫を生かした学級活動の向上を目指すという特別活動のねらいに迫るとともに、自発的に学級活動を楽しんでいく面白さを体感できるようにしたい。また、第5学年(高学年)への進級を見据え、自分たちの手で活動をアップデートさせる経験を通して、係活動をより一層充実させたいと考え、本議題を計画した。

学級活動（１）の発達段階に即した係活動の指導のめやすの例	
係活動 （中学年）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○様々な活動を整理統合して児童の創意工夫が生かせるような係活動として組織できるようにし、協力し合って楽しい学級生活をつくることができるようにする。</li> <li>○朝や帰りの会の時間などを生かして、積極的に取り組むことができるようにする。</li> </ul>
係活動 （高学年）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自主的・実践的に係活動を進めたり、自分のよさを生かせる係に所属したりして、継続的に活動できるようにする。</li> <li>○高学年にふさわしい創意工夫のできる活動に重点化するなどして、信頼し支え合って、楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることができるようにする。</li> </ul>

### (1) 指導観

係活動における「自分たちの手で生活を豊かにする」という実感は、自治的能力を育む上で不可欠である。本学級は1学期より「合意形成」の対話を積み重ねてきた。今後はこの土台を活かし、活動を単なる「役割の遂行」から「創意工夫による質の向上」へと進化させる段階にある。

指導にあたっては、児童の願いを「進化」のキーワードに集約し、具体的な実践へと導く。単なるアイデア出しに留まらず、目指す学級像に照らして「なぜ必要か」を検討させ、活動の「共通ルール」を自ら構築させる。このルールは「制限」ではなく、誰もが自信を持って活動の創意工夫に取り組む土台となると考える。ルールを自分たちの手で創り上げ、納得感を持って活動を始めるプロセスは、児童に「創意工夫と合意形成によって学級を変えられた」という実感につながる。ピアフィードバックの実践を通して、自他のよさを認め合うことで形成した心理的安全性を生かし、創意工夫を生み出す対話へとつなげていく。

## 3 評価規準

観点	よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
評価	合意形成の手順や、話し合いにおける役割（司会や記録など）の果たし方を理解し、適切に活用しようとしている。	目指す学級像に照らして、学級を「進化」させるための工夫を多角的に考え、自分たちの生活に生かせる解決策を見いだそうとしている。	話し合いで決まったことを進んで実践しようとしたり、互いのよさを認め合いながら学級生活をより良くしようとしたりしている。

#### 4 研究テーマとの関わり

当事者意識を持ち、係活動に主体的に取り組む児童の育成  
～自他のよさを認め合い、創意工夫を生み出す対話の工夫～

本研究テーマは、児童が自分たちの生活を自分事として捉え、互いを尊重しながらよりよい学級生活を創造していく姿を目指したものである。本時では、新組織における係活動の始動にあたり、「学級の進化のためのルール作り」を議題とする。この活動を通して、以下の二点から研究テーマの具現化を図る。

##### (1) 「当事者意識」の育成

係組織の再編成直後という、児童の意欲が高まっている時期に本議題を設定する。単に与えられた役割をこなす（当番的活動）のではなく、目指す学級像に向けて自分たちに何ができるかを考え、活動を「進化」させるためのルールを議論する。自分たちで決めたルールのもとで活動をスタートさせるプロセスを経ることで、「自分たちが学級を創っている」という当事者意識を高め、主体的な実践へと繋げていく。

##### (2) 「自他のよさを認め合い、創意工夫を生み出す対話」の工夫

対話の場面では、1学期に習得した「合意形成」の手順を活用する。各係の「やってみたい工夫」を出し合う中で、互いの創意工夫のよさを認め合う場を設定する。また、自由な活動に伴うこれまでの課題について「折り合い」をつけることで、全員が納得できる解決策を導き出す。この「納得感を伴う合意形成」のプロセスが、多様な意見を尊重し、新たな工夫を生み出す対話の在り方であると考えている。

#### 5 事前の活動

##### 【計画委員会の活動】

日時	児童の活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 (観点) 【評価方法】
1 / 1 6 (金) 放課後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・議題 BOX の議題案を確認し、選定する。</li> <li>・提案者への返事を書く。</li> <li>・提案者と一緒に提案理由をより具体的にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・議題選びの条件を念頭に置いて選定することを指導する。</li> <li>・提案練り上げシートを活用して、目的意識を明確にし、具体的な提案理由になるような支援をする。</li> </ul>	
1 / 1 9 (月) 放課後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動計画の作成</li> <li>・提案理由、めあて、話し合うこと、決まっていることを確認する。</li> <li>・司会・副司会・黒板記録の役割を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの経験や学級の実態を踏まえ、日時や場所などの条件を教師が設定する。</li> </ul>	

1 / 2 0 (火) 朝の会	・議題の決定	・議題選びの条件を意識しながら、議題の決定を進めるようにする。	
1 / 2 0 (火) 3校時	・議題や提案理由、意見等を「学級会ノート」に記入してもらう。	・話し合いが深まる対話ができるように、意見と理由をくわしく書くように伝える。	
1 / 2 0 (火) 放課後	・意見カードを整理する。 ・意見を短冊に書いて掲示する。	・学級会ノートを見て、「提案理由」に沿った考えか、理由も書かれているかを確認し、話し合いがスムーズに進められるように整理させる。	合意形成の手順や、話し合いにおける役割（司会や記録など）の果たし方を理解し、適切に活用しようとしている。（知識・理解）【観察】

【全員の活動】

日時	児童の活動	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 (観点) 【評価方法】
1 / 7 (水) 朝の会	・計画委員や担任の話を聞いて、議題にしたいことを議題 BOX に追加する。 ・話し合いの日を知る。	・係活動についての成果や課題について話し合い、まとめの学期を充実できる係活動について提案できるようにする。	
1 / 2 0 (火) 朝の会	・議題の決定	・計画委員会の提案のもと、全員で決定する。	
1 / 2 0 (火) 3校時	・自分の考えを意見カードに記入する。 ・議題や提案理由、意見等を「学級会ノート」に記入する。	・議題や提案理由を共通理解し、友達の意見を参考にしながら、根拠をもって意見を出す。	・目指す学級像に照らして、学級を「進化」させるための工夫を多角的に考え、自分たちの生活に生かせる解決策を見いだそうとしている（思考・判断・表現）【意見カード】
1 / 2 1 (金) ~ 1 / 2 2 (木) 休み時間	・短冊の友だちの意見を見て、話し合いの見通しをもつ。	・質問したいことや、伝えたいことをまとめておく。 ・意見をまとめる工夫を考えておく。	

## 6 本時の展開

### (1) 本時のねらい

係活動をより良くする工夫を出し合う中で、自他の考えのよさを認め合い、学級全体が安心して活動を楽しむための共通ルールを自分たちで決めることができる。

話し合いを通して「自分たちの手で学級活動を創る」という当事者意識を持ち、主体的に活動に取り組もうとする態度を養う。

### (2) 児童の活動

ハッピーターン学級会 活動計画 令和8年1月22日(木) 2校時	
議題	「係活動が進化(パワーアップ)するルールを作ろう」
提案理由 提案者 (さん)	3学期に入り、これまでの良かったところや困ったところを考えながら係を作り、新しいメンバーで係をスタートすることができました。しかし、活動する中で困っていることもまだあります。そこで、「明るくておもしろくて協力できる」ルールを作りたいと思います。そうすれば、もっと係活動が進化できると思います。
司会グループ	司会〇〇さん 副司会〇〇さん 黒板記録 〇〇さん 〇〇さん
話し合いのめあて	最後まで聞き合い、みんなが『それいいね!』と思えるルールを決めよう
話し合いの順序	気をつけること
1. 学級の歌を歌う (始業前)	・全員が学級の一員であることを自覚し、学級会へ楽しく参加する雰囲気作りをする。
2. はじめの言葉(1分)	・話し合いの手本となるように、大きな声ではっきりと話す。 (司会)
3. 計画委員の紹介 (1分)	・自分の名前とめあてをはっきりと話す。(計画委員)
4. 議題の確認(1分)	・電子黒板で示しながら、大きな声ではっきりと言う。(司会)
5. 提案理由の確認 (提案者)(1分)	・電子黒板で示す。 提案者→〇〇さん (前に出て大きな声で発表できるように、練習しておく。)
6. めあての確認 (全員)(1分)	・電子黒板で示す。
7. 先生の話(1分)	・姿勢を正して先生の話の聞けるようにする。
8. 話し合い (30分) 「係活動がパワーアップできるルールを決めよう」	【出し合う→比べ合う→まとめる】 ○各係の意見を <u>出し合う</u> 。(2分) ・事前に短冊で意見を掲示し、 <u>計画委員で発表する(出し合う)</u> 。←比べ合うの時間の確保のための時間短縮 ○ <u>比べ合う</u> 。 グループ(10分)→全体(15分) ○意見を <u>まとめる</u> 。(3分)

9. 決まったことの発表 (2分)	・決まったことから順序よく、分かりやすくまとめて発表する。 (黒板記録)
10. 振り返り (6分)	・振り返りを学級会ノートに記入する。(全員) ・時間があれば発表する。(2, 3名)
11. おわりの言葉 (1分)	・実践に向けて、協力していけるように元気よく話す。 (司会)

### (3)教師の指導計画

話合いの順序	指導上の留意点	◎目指す児童の姿 (観点)【評価方法】
1. 学級会の歌	・学級会への意欲が高まる雰囲気作りに努める。	◎合意形成の手順や、話合いにおける役割(司会や記録など)の果たし方を理解し、適切に活用しようとしている。(知識・技能)【観察】
2. はじめの言葉	・大きな声ではっきり言えるように、事前に指導しておく。	
3. 計画委員の紹介		
4. 議題の確認		
5. 提案理由の確認	・提案者に、全員に思いが伝わるように話すことを伝えておく。	◎目指す学級像に照らして、学級を「進化」させるための工夫を多角的に考え、自分たちの生活に生かせる解決策を見いだそうとしている。(思考・判断・表現)
5. 話合いのめあての確認	・めあてを事前に確認しておくように指導しておく。	【観察】
6. 話合い	・司会が困った時は、提案理由にもどるように声かけをする。	
7. 決まったことの発表	・多様な意見を黒板係が整理できるように指導しておく。	◎話合いで決まったことを進んで実践しようとしたり、互いのよさを認め合いながら学級生活をより良くしようとしたりしている。(主体的に取り組む態度)
8. 振り返り	・「めあてに沿って話合いができたか」「決まったことをどのように実践していくか」振り返りの視点を与える。	【振り返りカード】
10. おわりの言葉	・学年のまとめとして大切な活動だという視点で話せるように指導しておく。	

### 7 事後の活動

日時	児童の活動	・指導上の留意点	◎目指す児童の姿 (観点)【評価方法】
1 / 2 3 (金) 休み時間 放課後	・決まったことを学級活動コーナーに掲示する。 (計画委員)	・決まったことを掲示し、係活動を盛り上げる雰囲気作りができるように助言する。	◎話合いで決まったことを進んで実践しようとしたり、互いのよさを認め合いながら学級生活をより良くしようとしたりしている。(主体的に取り組む態度)【ワークシート】
1月23日 ～	・決まったこと実践していく。 (全員)	・自発的に協働している姿を見守る。	

## 【検証授業の考察】

### 1 納得感を伴う深い合意形成を目指した対話の構造化

「進化」というキーワードを用いたポジティブな目標設定は、児童が目指すべき学級生活を自分事として捉え、自発的に活動を楽しむ原動力となった。道徳科（相互理解・寛容）との連動により、教材で学んだ「多様な立場の尊重」が、実際の学級会での「折り合いをつける」という実践的な技能へと転移し、対話の質が向上した。

また、思考ツール（図 12）を活用したことで、意見の整理の手立てとなり積極的に対話をする様子が見られた（図 13）。



図 13 思考ツールを見て対話を深める様子

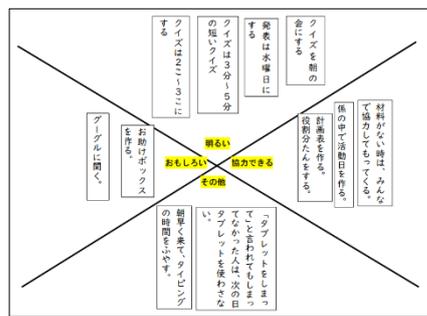


図 12 思考ツール（Xチャート）

また、ICT（電子黒板やタブレット）とアナログ（短冊・ワークシート）の併用による意見の可視化は、学級会の進行を効率化し、議論の深化を促した。限られた時間内で検討時間を十分に確保できたことは、合意形成の質的向上につながった（図 14）。



図 14 ICTとアナログを併用した学級会の様子

### 2 自分たちで学級を創っていく当事者意識へ

図 15 は、学級会前に学級活動コーナーで掲示した提案理由である。この「困りごと」の共有を通じて、児童は係活動を自身の生活を豊かにする手段として改めて理解することができた。個別の活動に留まっていた意識が、全体での対話を通じて「集団としてより良く創り上げるもの」へと深まった。児童の振り返りに、

「全部の係を進化させたい」という言葉があった。このことは、他者の活動を認め、共に学級を創る連帯感の表れであると考えられる。自分の役割を超えて学級全体に目を向け、相互に高め合おうとする態度の変容は、当事者意識をもってきた証だと捉えた。

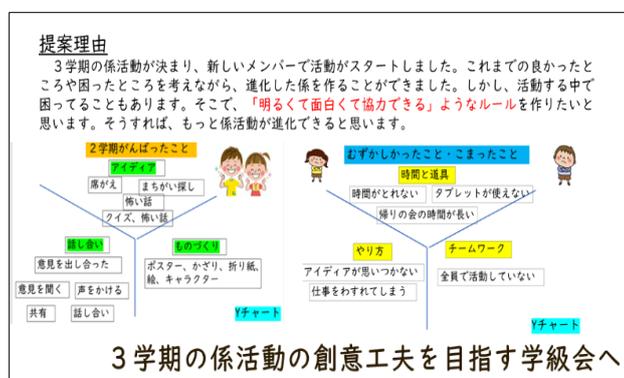


図 15 学級の課題と提案理由

### 3 自他のよさを認め合う場からインクルーシブな集団形成へ

本時の学級会においては、支援を要する児童が主体的に参画する場面も見られた（図 16）。以前まで学級会への参加に課題があった児童が、仲間と協力し進んで発表できたことは大きな成果である。その要因は、計画委員による ICT や思考ツールなどの意見の可視化等、視覚的支援が彼らの状況把握を助けと考えられる。また、これまで積み重ねてきた「自他のよさを認め合う場の構築」により、学級全体に受容的な雰囲気が醸成されていた点も挙げられる。さらに、彼らを自発的に支えた児童にも仲間のよさを引き出そうと姿も見られた。本研究が目指した「当事者意識」や「自他のよさを認め合う」実践は、インクルーシブな集団形成へとつながり、共生社会の形成者に求められる資質を養う機会となった。



図 16 発表の様子

### 4 個の思考を保障するグループ編制の最適化

本時のグループ協議では、一部で 5～6 名の編成となった。この規模では、一人ひとりの発言機会が確保しにくく、発言しない児童が生じる要因となった。全員が当事者として参加するためには、ペアや 4 名程度の小規模編成とすることが、対話の質と量を担保する上で最適であると実感した。

### 5 「意見をまとめる」から「考えを深め合う」話し合いへの転換

本時では、「クイズの意見は合わせてもいいと思います」などの、合意形成の場面も見られた。しかし、図 17 で示すように意見が多岐にわたったことで議論が分散し、児童の思考が提案された意見の分類や整理といった形式的な作業に終始する結果となった。今後は計画委員会で提案理由に照らして意見を精査させ、話し合いの論点を明確に絞り込む事前指導を重視したい。提案された意見を本質的なものに絞り込むことは、司会グループが時間内に「意見をまとめる」ことに捉われることなく、児童が納得のいくまで本音をぶつけ合って「じっくりと考えを深め合う時間」を保障することへとつながる。思考を深める「本質的な合意形成」の場を構築していくことが、次なるステップである。

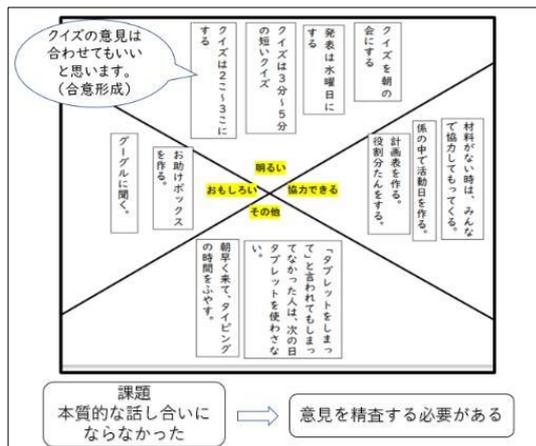


図 17 多岐にわたった意見

## 6 係のメンバー編成について

メンバー編成においても、思考ツールを活用した。クラゲチャートの足に活動への意欲を記入させることで、適材適所の編成を目指した(図18)。以前は友人関係を優先した編成によりメンバー構成に偏りが生じることが課題であったが、今回はワークシートの内容を吟味し、現担任と相談の上で人間関係にも配慮した。主体的な活動を目指す中でも、リーダーシップを持って適切な編成を行うことが、よりよい学級作りには不可欠であると実感した。

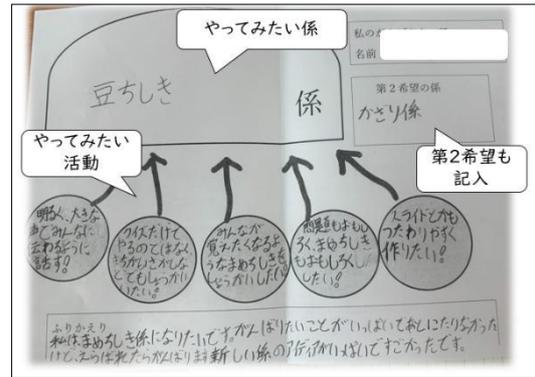


図18 編成に生かしたワークシート

## 7 当事者意識の育成と波及

2学期に停滞傾向にあった給食席替え係は、3学期の係活動のテーマを「進化」の中で、メンバーを刷新して「給食席替えKP(乾杯)係」として再編された。新メンバーは、2学期の課題を振り返りながら、対話を重ね、課題を前向きに解決しようとする姿が見られた。

「久しぶりに全員登校したので

みんなで乾杯したいと思います」と誇らしげに牛乳を手に乾杯する学級の様子は、自分たちで学級をよりよくしている充実感に満ちていた。こうした主体的な姿は、確かな当事者意識を育むとともに、学級全体へと共鳴し、集団の自治的な発展を促すことにつながると考える(図19)。



図19 係活動の発展のプロセス

## Ⅶ 結果と考察

研究仮説に基づき、「自他のよさを認め合う場の構築」「創意工夫を生み出す対話の工夫」を活用した授業づくりを通して、「当事者意識を持って主体的に係活動に取り組むこと」に有効であったかを検証する。検証には、アンケートの分析を基に行っていく。

### 1 自己有用感と当事者意識の変容

アンケート結果(図20)において「自分の活動が学級の役に立っている」の質問に「そう思う」と回答した児童は、10月比で20.4ポイントの大幅な向上を示した。この数値は、係活動が「個人

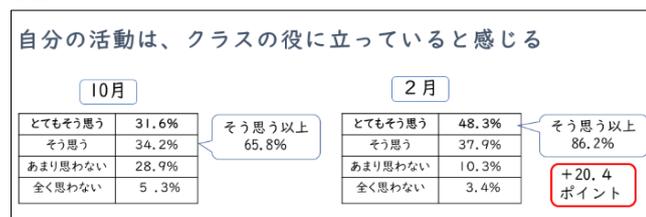


図20 アンケート結果

の役割」から「学級の一員として集団に働きかける価値ある活動」の変容だと捉えることができる。この成果から、「自分には貢献する力がある」という自己有用感を生み、集団をより良くしようとする当事者意識へとつながったと考える。

## 2 対話を通じた当事者意識の変容

アンケート結果（図 21）において「係のメンバーと活動内容やアイデアを話し合っている」の質問に「そう思う」の回答が 9.8 ポイント向上したことは、児童が対話を通じて創意工夫を生み出す「創り出す面白さ」を実感している

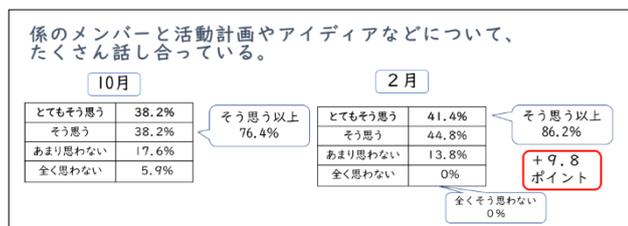


図 21 アンケート結果

表れだと思える。仲間との対話から確かな手応えを得ることで、「自分たちの力で学級をより良くできる」という確信が生まれ、互いに高め合う関係性が醸成された。こうした個々の働きかけが「集団の豊かさ」に直結するという実感は、係活動の枠を越え、自らの意思で学級を創り上げる「自治的活動の参画者」としての当事者意識を確立するに至ったと捉えた。

## 3 テキストマイニングによる意識変容の分析

### (1) 個の成長を基盤とした自治的活動の推進

「係活動で自分の進化したところ」を問うアンケートの自由記述をテキストマイニングした結果、「話し合える」「つくれる」「進化」「アドバイス」といった、相互の関わりや創造的な活動を示す語群が中心的に抽出された（図 22）。この結果は、児童の意識が「決められた仕事をこなす」段階から、仲間と意見を交わして新たな価値を創造する「対話的な活動」へと質的に転換したことを示している。

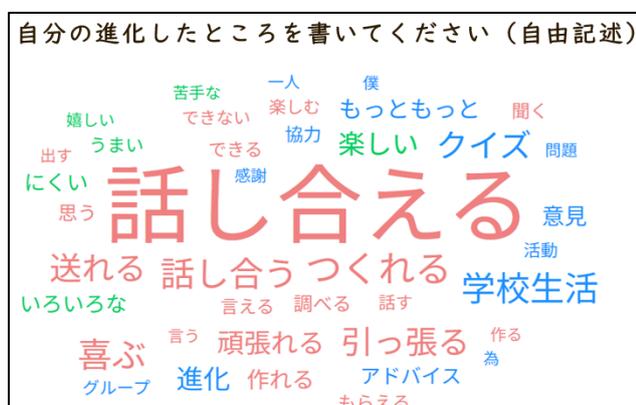


図 22 テキストマイニングの結果

特に「話し合える」という語の頻出は、心理的安全性が担保された集団の中で、活動上の悩みや葛藤を伴う対話も、前向きな学びのプロセスとして捉えられていることを示唆する。さらに「進化」「つくれる」といった言葉からは、係活動の枠を超え、自らの力で学級をより良くしようとする意欲が読み取れる。これらの語群は、児童が課題解決に主体的に取り組む当事者意識を育てていることを示していると考えられる。

